公開研究会

子どもの哲学 in 甲南大学(神戸市・東灘区)

日　　時:2017年10月21日(土)15:00〜15:50(第一部)、
　　16:10〜17:00(第二部)
会　　場:甲南大学18号館3階講演室(人間科学研究所)
企　　画:川口　茂雄(甲南大学文学部)
講　　師:川﨑　惣一(宮城教育大学教育学部)

現在、日本でもブームが広がりつつある〈子どもの哲学〉。甲南大学人間科学研究所ではこのたび初めて、〈子どもの哲学〉を開催しました。

大人を対象とする〈哲学カフェ〉が近年国内各地で浸透していますが、その小学生版が〈子どもの哲学(p4c, philosophy for children)〉であるとも言えます。当研究所は世代間交流を関心事の一つとしていますが、小学生参加企画の機会はこれまでなかなかなかったもので、今後も継続的に〈子どもの哲学〉を実施してゆければと考えています。

今回は国内でのp4c主要拠点の一つである宮城教育大学から川﨑惣一教授をお招きし、第一部では近隣の小学生とp4cを実践し、第二部ではp4cの概要をレクチャーいただきました。宮城教育大学では東日本大震災以後の子どもたちのケアの一環としてp4cに力を入れた経緯があり、これが阪神・淡路大震災を契機として設立された当研究所にとって共鳴せざるをえない活動であることは言うまでもありません。

第一部には興味を持った東灘区近隣の小学生にご参加いただけました。みんなでいろいろなことを「考える」ことができました！次いで第二部では大学教員・学生を対象として、川﨑先生からp4c実践のポイント「セーフティ」「考えること」「あせらない」等についてご教示をいただくとともに、文部科学省が小学校から大学までに導入し推進しようとしている「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」の一環として今p4cが注目されていることを教えていただきました。

「主体的・対話的で深い学び」の新たな具体的導入は、今後数年以内に全国の小学校・大学が直面する課題です。しかし「対話的」と「深い」との両立に困難が指摘されるなど、その実現には心配される面も多々あります。このような、時代に合った教育のあり方が数十年ぶりに改めて模索される時期において、対話的「探求」としての哲学のポテンシャルが再発見され、p4cという新しい形で活性化していることが実感できる一日となりました。

(報告者:川口　茂雄)

シンポジウム

人口減少問題に挑戦する＜次世代育成＞研究の展望

日　　時:2017年11月18日(土)14:00〜17:00
場　　所:甲南大学18号館3階講演室(人間科学研究所)
企　　画:森　茂起(甲南大学文学部)
講　　師:足立　泰美(甲南大学経済学部)
　　中里　英樹(甲南大学文学部)
　　前田　正子(甲南大学マネジメント創造学部)
　　北川　恵(甲南大学文学部)
　　森　茂起(甲南大学文学部)

本研究会は、子ども・子育て支援に関する研究・実践を行っている学内の研究者が集い、政策学、経済学、社会学、心理学のそれぞれの立場から、学際的に子ども・子育てをめぐる現状と、政策、実践課題を考えることを目的に開催された。各研究者が行ってきた活動を報告した上で、それらが照らし出す現状と課題を検討した。具体的には、国レベルの政策課題となっている保育待機児童解消、働き方改革と連動する父親の子育てに焦点が当たり、各立場からの議論が活発に行われた。最後に、来年度以降の共同研究計画を検討した。

これからの活動

公開研修会

児童虐待と少子社会－子育て共同参画社会へ－

日　　時:2018年2月24日(土)14:00〜17:00
場　　所:甲南大学18号館3階講演室(人間科学研究所)
企　　画:森　茂起(甲南大学文学部)
講　　師:金子　勇(神戸学院大学現代社会学部)

甲南アトリエ

親子・孫子の創作ワークショップ:身近な自然を生かしてアートしよう〜和紙、葉っぱ、枝をつかって

日　　時:2018年3月3日(土)9:30〜12:30
場　　所:甲南大学18号館3階講演室
企　　画:内藤　あかね
　　(甲南大学人間科学研究所／客員特別研究員)
講　　師:椋田　三佳(美術家)

公開研究会

高齢者の精神的健康:加齢のパラドックスに焦点をあてて

日　　時:2018年3月27日(火)14:30〜14:50
場　　所:甲南大学18号館3階講演室
企　　画:北川　恵(甲南大学文学部)
講　　師:沼田　恵太郎(甲南大学人間科学研究所)

公開研究会

情報知能の科学的理解に向けて:心理学研究を通じた挑戦

日　　時:2018年3月27日(火)15:00〜17:00
場　　所:甲南大学18号館3階講演室
企　　画:子安　増生(甲南大学文学部)
講　　師:野崎　優樹(京都大学特定講師)

発行年月日:2018年3月10日

編集後記

人間科学研究所の図書室では貸出可能な一般図書に加えて、子育て関連図書コーナーが設置されています。同コーナーには心理学やアートだけでなく、教育学や社会学などの書籍も配架されており、コンテンツも充実して参りました。

第五期の活動も2年目となりました。今年度は過去コンテンツの整理を中心に、研究所ホームページの内容を更新しています。KIHSの研究活動にご関心をよせて頂くとともに、活発なご意見を頂けることを期待しています。

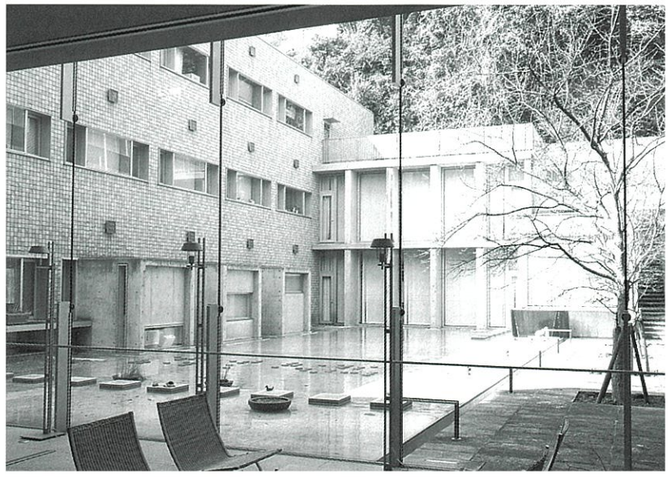
KIHS NEWS LETTER 2018 Vol. 35
発行
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学人間科学研究所 Konan Institute of Human Sciences
甲南大学18号館内 Tel/Fax:078-435-2683 E-mail:kihs@center.konan-u.ac.jp Web-site:http://www.konan-u.ac.jp/kihs/

NEWS LETTER
甲南大学人間科学研究所

KIHS
Konan Institute of Human Sciences

2018 Vol. 35

今年度のニュースレターをお届けします。
KIHSにおける第五期の活動も2年目となりました。
地域を中心とした研究実践活動「子育てと社会」と
「アートと発達支援」の二軸を中心に、
さまざまな試みを行っています。
今号は本年度の活動内容報告となります。
年度内に開催予定の二件を除く十件について、
企画者（あるいは講演者）の先生方にご報告頂いています。
ご味読ください。



活動報告

●2017年度の活動

研究会

Germany Today: Psychoanalytical approach to present cultural and political phenomena
（ドイツの今一現在の文化的・政治的現象に精神分析で迫る一）

日　　時：2017年4月17日（月）14：40～16：20
場　　所：甲南大学18号館3階講演室
講　　師：Heidi Spanl & Utz Palussek（ドイツ、ミュンヘン）
　　DPG（Deutshce Psychoanalytische Gesellschaft ドイツ精神分析協会精神分析家）
企画・司会：森　茂起（甲南大学文学部）

講師が急遽帰国されたため公演は中止として、企画者（司会者）が原稿をもとに概説する形式に変更しました。ドイツの社会的事象について、精神分析の視点から興味深い示唆を得ることができました。大学院の企画のため、クローズドで開催を行いました。　（文責：森　茂起）

公開研究会

2016年度KIHS研究活動報告

日　　時：2017年5月20日（土）15：30～17：00
場　　所：甲南大学18号館3階講演室
企　　画：沼田　恵太郎（甲南大学人間科学研究所博士研究員）

昨年度の活動報告として、2016年6月11日（土）および同年12月18日（日）に開催された『連続公開講座「アートと発達支援－学校から地域社会へ」』の教育効果測定の結果を報告しました。シンポジウムの開催前後で発達障がいに関する知識やイメージを測定し、比較検討を行ったところ、社会人では発達障がいに関する知識の増加が、学生では発達障がいに関するイメージの上昇が認められました。障がいによって「できない」ことではなく「できる」ことに注目していくことの、教育・実践活動における意義が示唆されました。また、博士研究員の独自の活動として、高齢者の精神的健康に関する発達心理学的研究の成果が報告されました。年を取ることで記憶などの認知機能は低下していきますが、その一方で精神的健康は上昇していくという、「加齢のパラドックス」に関する研究成果が紹介されました。世代間比較（実験室実験）と世代内比較（パネル調査）に関する知見から、加齢には悪い側面だけでなく、良い側面もあることが示唆されました。2016年度から2017年度の教育効果測定の結果については、研究所紀要「心の危機と臨床の知vol.19」にKIHS活動報告として公開予定です。　（文責：沼田　恵太郎）

公開講座

発達障がいとアート
（連続公開講座「アートと発達支援一学校から地域社会へ」Vol.4）

日　　時：2017年7月15日（土）13：00～14：30
場　　所：甲南大学132教室
講　　師：望月　直人（大阪大学キャンパスライフ健康支援センター准教授）
　　富田　千果子（特定非営利活動法人障碍者芸術推進研究機構理事）
　　大西　彩子（甲南大学文学部准教授、人間科学研究所兼任研究員）
　　服部　正（甲南大学文学部准教授、人間科学研究所兼任研究員）

「アートと発達支援」をテーマとする研究教育プロジェクトでは、昨年度から連続公開講座を開催しています。その第4回目となる今回の講座では、発達障がいのある子どもや大学生の支援に携わっておられる専門家の望月直人先生と、発達障がいのある方の創作活動の支援を実践する専門家であり、発達障がいのある子どもを育ててこられた当事者でもある富田千果子先生にご講演いただきました。最初に望月先生から、発達障がいについての基礎的な知識や国内外の最新の知見についてお話しいただきました。その知識を踏まえたうえで、富田先生からは発達障がいのある息子さんをどのように支援したか、その際に創作活動がどう役立ったかを具体的にお話しいただきました。息子の晃生さんが企業ロゴに強い興味を持ったことから、ロゴの文字を用いた視覚的支援の工夫を行ったことや、工作でロゴの文字を立体的に造形することが晃生さんの成長につながった事例などを、多くの写真を交えて紹介していただきました。

講座は、文学部人間科学科の1年生ほぼ全員が聴講したほか、この分野に関心のある学外の方の参加もありました。学生の感想には、発達障がいについて知ることで発達障がいの人たちの存在を身近に感じ、肯定的なイメージを持ったこと、創作活動によって当事者と支援者の双方の自尊感情が高まることに意義があることに気づいたことなどが記され、参加者にとって良い学びの場となったことがうかがえました。　（文責・服部　正、大西　彩子）

研究会

「再び〈戦争の子ども〉を考える」準備会

日　　時：2017年7月28日（金）15：00～19：00
場　　所：甲南大学18号館3階講演室
企　　画：人見　佐知子（岐阜大学／歴史学）
報　　告：森　茂起（甲南大学／心理学）
　　東谷　智（甲南大学／歴史学）

〈戦争の子ども〉とは、ドイツ語のKriegskindの翻訳で、ナチスが政権を掌握して以降、第二次世界大戦終結までの期間に子ども時代を過ごした（あるいはその期間中に生まれた）世代を指す言葉として、精神分析家のミヒャエル・エルマンが2003年の講演ではじめて用いた造語です。人間科学研究所では、〈戦争の子ども〉概念をもちいて、2007年度～2011年度にかけて共同研究を実施しました。

本研究会は、日本オーラル・ヒストリー学会第15回大会（2017年9月3日）においてテーマセッション「再び〈戦争の子ども〉を考える」がもうけられるにともない、その準備会を兼ねて、〈戦争の子ども〉プロジェクトを振り返り、成果と課題を共有することを目指して開催されました。

2本の報告はともに、本プロジェクトを特徴づける心理学と歴史学の協働のあり方や相違点への問題提起をふくむ充実した内容となりました。議論をとおして、〈戦争の子ども〉研究とオーラル・ヒストリー研究が交錯するところにうまれる知見やさらなる研究進展の可能性が浮かび上がってきました。
（文責：人見　佐知子）

シンポジウム

戦争文学のトラウマ

日　　時：2017年8月10日（木）14：00～18：00
会　　場：甲南大学ネットワークキャンパス東京
シンポジスト：下河辺　美知子（成蹊大学、批評理論・アメリカ文学文化）
　　野上　元（筑波大学、歴史社会学・メディア論）
　　森　茂起（甲南大学、臨床心理学・精神分析）
　　西　欣也（甲南大学、思想史・芸術理論）
協　　賛：Journal of Literature and Trauma Studies
　　（Nebraska University Press）

本研究所では「文学とトラウマ研究」誌の編集主幹であるデヴィッド・ミラー氏を招いて2016年2月に公開研究会を開催しました。その後、この雑誌で戦後日本文学の特集を組むことが決まっています。今回の研究会は、この特集に寄稿予定の研究者が集い、互いの研究内容を踏まえつつ共同討議を行う目的で開催されたものです。

下河辺美知子氏は「SilencetMuteness：アメリカという他者に呼びかける声」と題して、大江健三郎の初期の小説を仔細に読み解きながら敗戦記憶の原風景を探られました。野上元氏のご発表「誰／何が原爆の恐怖を媒介したのか？：原民喜における「報告」と「予感」」では、原爆投下当時の広島の地図などを手掛かりに、原民喜の小説が生まれてくる条件を具体的に考察されました。森茂起氏の考察「誰も知らない時間へ：大岡昇平と特攻」は、大岡昇平の自己のうちに、戦場で倒れた兵士と、慰霊を行う文士との分裂があることを指摘するものでした。最後に西欣也の「死のlyricismと不死のrealism：戦争詩をめぐって」では、フロイトの文化論に結びながら、戦後の詩のテクストに現れる死の扱いが比較分析されました。

心理的トラウマと文学表現との関係を様々な観点から探究するといった学際的な関心の持ちようは、日本ではまだ発展の端緒にありますが、この日登壇されたシンポジストはいずれも先端的な問題意識を持って刺激的な議論を繰り広げられました。ディスカッションでは、戦争に対する「喪の作業」が日本ではいかに不十分であるかが指摘され、また個々の作家の創作態度の変遷や作品のディテールをめぐって多様な解釈が出されるなど、有意義な意見交換がなされました。　（文責：西　欣也）

公開講座

第8回　お父さん・お母さんのための子育て応援講座
「子どもの安心基地になるために」

日　　時：2017年9月28日（木）10：30～12：00（受付開始10：00～）
場　　所：甲南大学18号館3階講演室
講　　師：北川　恵（甲南大学文学部教授・人間科学研究所所長／臨床心理士）
スタッフ：岩本　沙耶佳（甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員）
　　甲南大学大学院生・学部生11名、託児担当者2名
参 加 者：54名（うち、大人30名、子ども24名（託児17名／保護者同室7名）

子どもは、お父さん・お母さんが「安心基地」になってくれることで、不安なときは信頼できる人を頼りながら、自分でいろいろな挑戦をすることができるようになります。本講座は、そうした関係を築くうえで大切なポイントをお伝えするために、毎年開催しています。質疑応答では、「イヤイヤ期への対応」「寝かしつけの苦労」など、日頃の子育てで迷ったり困ったりすることについて、たくさんの質問をしていただきました。また、今年で9年目を迎える「親子がホッとつながるグループ」にも多くの方に参加申込をしていただきました。来年度の子育て応援講座は、例年より早い時期の2018年5月頃を予定しています。　（文責：北川　恵・岩本　沙耶佳）

第9期　親子がホッとつながるグループ2017／子育てライブラリー

日　　時：2017年10月5日から11月16日、毎週木曜日（全7回）
　　9：30～10：00　子育てライブラリー
　　10：00～11：30　「安心感の輪」子育てプログラム
場　　所：甲南大学18号館演習室2（プログラム）／講演室（ライブラリー・託児）
実施責任者：北川　恵（甲南大学文学部教授・人間科学研究所所長／臨床心理士）
ファシリテーター：岩本　沙耶佳（甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員／臨床心理士）
スタッフ：甲南大学大学院生・学部生10名
　　子育てライブラリー／託児担当者2名
参 加 者：母親11名、子ども9名

「親子がホッとつながるグループ」は9年目の開催となり、今年度からは岩本がファシリテーターとなって「安心感の輪」子育てプログラムを行いました。小さな子どもにとっては養育者に安心感を与えてもらえることがとても大切です。しかしながら親にとっては、忙しくて余裕が無かったり、しつけとの兼ね合いで困ったりすることもあります。そうした実際問題も含めて、子どもとの関係をプログラムに沿って振り返りました。参加者からは、「子どもの気持ちに寄り添うことをこころがけたら、子どもがいろんな話をしてくれるようになった」「研究でわかったことに基づいている内容だから、自信をもって子どもに関われる」「これからの子育てにおいても大切な視点だと思う」などの感想を寄せて頂きました。

また、今年度は初めての試みとして、親子でご参加いただける子育てライブラリーを開催しました。保育担当者による読み聞かせ、絵本や紙芝居などを楽しんで頂きました。

来年度は、「安心感の輪」子育てプログラム（全8回）＆子育てライブラリーを2クール（前期と後期）開催する予定です。参加者募集を年度初めに行いますので、ぜひご参加・お問い合わせください。
（報告者：北川　恵・岩本　沙耶佳）

公開研修会

第15回KIHS心理臨床ワークショップ
「MUSIC lets you feel, MUSIC lets you express
－音楽療法とは何か－」

日　　時：2017年10月28日（土）13：30～15：30
会　　場：甲南大学人間科学研究所（甲南大学18号館）
企　　画：大澤　香織（甲南大学文学部・人間科学研究所／臨床心理学）
講　　師：北脇　歩（洛和会京都音楽療法研究センター）
　　柴田　恵美（洛和会京都音楽療法研究センター）
　　安達　紗代（洛和会京都音楽療法研究センター）
共　　催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム

今年度の心理臨床ワークショップは、これまでと少し趣を変え、音楽療法の理論やノウハウを心理臨床に関わる対人援助職のみならず、さまざまな職種の方々と共有することを目指して企画・開催いたしました。ワークショップでは、最初に北脇歩先生（洛和会京都音楽療法研究センター）より、音楽療法の歴史や理論に関する講義が行われました。北脇先生は、音楽療法で修士号を取られた数少ない先生です。音楽療法については「何となく」理解していたつもりでいましたが、北脇先生からこれまでの歴史と理論の変遷が丁寧に説明され、とてもわかりやすい内容でした。その後、柴田恵美先生（洛和会京都音楽療法研究センター）と安達紗代先生（洛和会京都音楽療法研究センター）が加わり、北脇先生の講義にあった理論に基づいて、実際に楽器を使った実習が行われました。これまでに触れたことのない珍しい楽器が数多く並べられており、その楽器に触れるだけでも大変貴重な機会となりましたが、その日初めてお会いした参加者の方々と共に音を奏で合わせていき、その体験をお互いの音と言葉で共有する中で、音楽療法の意義や可能性を考えることのできた素晴らしい実習となりました。

人間科学研究所が主題としている研究・実践テーマ（子育て・発達支援など）では、地域連携・多職種連携が重要となります。今回のワークショップでは、心理職だけでなく他職種の方々とも音楽を通じてつながるきっかけとなりました。今後も、対人援助に関わるさまざまな職種の方々と共有できるような場を人間科学研究所で企画し、地域の皆様に発信していきたいと思います。
（文責：大澤　香織）

公開講座

発達障がいとアート
（連続公開講座「アートと発達支援一学校から地域社会へ」連続公開講座vol.5）

日　　時：2017年11月4日（土）13：00～14：30
場　　所：甲南大学18号館3階講演室（人間科学研究所）
講　　師：左海　和可子（社会福祉法人素王会アトリエ インカーブチーフ）
　　片岡　學（社会福祉法人素王会アトリエ インカーブスタッフ）
　　髙柳　伸哉
　　（愛知東邦大学人間健康学部助教、アスペ・エルデの会西三河支部ディレクター）
　　大西　彩子（甲南大学文学部准教授、人間科学研究所兼任研究員）
　　服部　正（甲南大学文学部准教授、人間科学研究所兼任研究員）

「アートと発達支援一学校から地域社会へ」をテーマとするこの研究教育プロジェクトの目指すべき方向性を考えるために、特定非営利活動法人アスペ・エルデの会（名古屋市）で発達障がいのある子どもの活動を支援する専門家と、社会福祉法人素王会アトリエ インカーブ（大阪市）で障がいのある方の創作活動の支援を実践する専門家を招いてシンポジウムを開催しました。

今回のシンポジウムでは、支援活動としての取り組みの内容や発達障がいのある子どもたちの意外な才能や独特な感性などを実際の作品や事例を通してご紹介いただきながら、発達障がいのある子どもたちの活動を支援する現場での工夫や課題について考えました。また、発達障がいのある方の創作活動の年代ごとの適切な支援や創作環境のあり方についての意見交換を行いました。　（文責：大西　彩子・服部　正）